

授業実践の振り返り

補習授業校名：セントルイス日本語教室 指導者：ラーク有紀子 授業実施：2023年 11月 11日

学年・教科：小学6年・国語

単元名：「古典芸能の世界 一演じて伝える」

時	活動	成果・子どもたちの様子
1	(1) 教科書を読み、狂言、能の特徴をまとめる。 (2) 古典芸能の独特な表現方法を知り、実際に演じてみる。	<ul style="list-style-type: none"> ・本文を読み、特徴をまとめることができた。 ・狂言で使用される独特な言葉を知り、使うことができた。 ・狂言独特の感情表現を知り、真剣に模倣することができた。 ・面を使い、顔の向きや動作から、登場人物の気持ちを想像することができた。 ・海外在住の子どもたちにも人気のジブリ映画「千と千尋の物語」内のキャラクターである「カオナシ」のお面を使用したことも活動意欲を高めることにつながったようだ。この面をつけて演じてみたいと、出席者全員の手が上がった。
2	(1) 教科書を読み、歌舞伎、人形浄瑠璃（文楽）の特徴をまとめる。 (2) 古典芸能の独特な表現方法を知り、実際に演じてみる。	<ul style="list-style-type: none"> ・本文を読み、特徴をまとめることができた。 ・資料動画を視聴し、歌舞伎の表現方法を知り模倣することができた。 ・事前に予定はしていなかったが、子どもたちの様子から女形にも挑戦することができた。 ・人形浄瑠璃の資料動画を視聴した際、叩きつけるような音の太棹三味線の迫力に圧倒されていた。 ・木製人形模型を3人で動かし、指定された場面の様子を表現することができた。指定した場面は、参加者全員が把握しているだろうと思われる内容にしたことから、阿吽の呼吸で上手に人形を動かすことができた。 ・活動の感想をノートに書き、発表することができた。

<伸ばせた力、子どもの変化、保護者の反応など>

- ・古典芸能について理解を深め、昔の人のものの見方や感じ方を知ることができた。
- ・古典芸能への興味・関心が深まり、日本に帰国した際には、実際の演劇を鑑賞したいという意見が出た。
- ・古典芸能で使用される独特な言葉を理解した後、児童自ら幾度となく繰り返していた様子から、言語文化への興味・関心を伸ばすことができた実感している。
- ・国語科には出席をしない継承語クラス参加グループの児童らに対し、研究授業に出席した児童が授業の学習活動を伝え、狂言や歌舞伎の模倣を一緒に行っていた。

<所感>

・新出漢字もない小単元は、補習校では取り扱われないこともあるようだ。しかしながら、9割の児童が永住組であるという小6のクラスに在籍する児童にとっては、「古典芸能の世界一演じて伝える」のような単元こそ、伝統的な日本の言語文化に触れ、親しむ機会として最適な単元ではないだろうかと考え、研究授業で取り扱うことを決めた。実際に授業を行ってみると、古典芸能など目にしたことがない子どもたちの目は輝き、笑みを浮かべ、どんどんと吸収していくのが明らかだった。教科書の本文で知識を得て、体験することで理解を深める。この学習のやり方が、日本語力が多様な子どもたちが集まるクラスにとっては理想的であったと実感することができた。参考資料となる画像や動画の入手もインターネットを介して容易にできるようになった近年、インターネット接続が可能な教室であれば、十分に古典芸能の世界観を楽しむことができる。子どもたちは、視覚・聴覚から刺激を受けることで理解が深まり、学習者全員が本単元の目標を達成することができたように思う。